

「合い言葉は？」

「……へ？」

「合い言葉を言いなさい」

「いや、あの、そんなもん、いるんですか」

「アドリブを効かせなさいよ、つまんないわねえ」

「急に言われてもね。それより早く入れてくれよ。寒いったらないぜ」

「合い言葉ー」

「……開けゴマ」

「ださっ」

「いや、ださいも何も、なあ」

「もうちょっと気の利いた合い言葉、言えないの？」

「いや、愛の告白とかだったらさ、オレも気の利いたと言いますよ。言わせていただきま  
すよ。でも合い言葉にそんなものを求められても困るわけですよ。つつか、どうでもいいから  
早くチェーン外してくれる？」

「はいはい」

「寒かったんだからな。この季節にバイク乗るのがどれだけ応えるか、わかんたろ？」

「今年一番の冷え込みだもんねえ」

「それを、やっとストープにあたれると思ったたら合い言葉を求められるオレの気持ちにもなっ  
てみてくださいよ。あー、あつたか」

「こらこらストープを抱くなストープを」

「じゃあ君を抱くー」

「寄るなオオカミ」

「ひでえな。……なんだよ、君のとこだって散らかってんじゃん。オレの部屋のこと、汚い汚  
い言うくせにさ」

「これは、しょうがないの。今ちょっと忙しくて、片付けてる時間ないから」

「ちよっと？ずいぶん長期間に渡って堆積した乱雑さだと思っんですが？」

「うるさい。コーヒーでいい？」

「うん」

「濃いめにする？」

「いや、薄めで」

「それじゃ濃いめにするね」

「……」

「レポートがたくさん出てるから、徹夜しなくちゃいけないんだもの」

「さいですか」

「別に今夜は遅くまで、とかいうんじゃないから誤解しないでね」

「おのれ心を読みおったな！」

「まったく。凄い長めのレポートなの。うんざりだわ」

「あのさ。じゃあ、今日はオレ、どうして呼ばれたの？」

「ん？」

「いや、だってレポートで忙しいんだろ？」

「そうよ」

「忙しいんだったら、オレ、邪魔なんじゃないの？」

「手伝ってもらうに決まってるでしょ」

「……」

「畏にかかったオオカミ、ってとこね」

「んなこと、電話じゃ言ってなかったじゃんか」

「そうだったけ」

「そうだよ。淋しいから来てくれない？、とか言っただじゃんか」

「そうだったかしら」

「そうだよ。だからオレはこのクソ寒い中、急いでバイクで来たんだよ？」

「大変だったわね」

「……」

「こらこら膝を抱えるな膝を」

「いたいたいな男心を利用しやがって」

「のの字を書くな、のの字を」

「ちきしょう、金輪際、女なんて信じねえぞ」

「そうぐれないでよ。レポートが朝までに終わったら、いいから。ね？」

「ホント？」

「はいはい、目キラキラさせない」

「どんなレポートなの？」

「哲学の授業のレポートよ」

「オレ、哲学なんてわかんないよ」

「大丈夫。知識は必要ないわ。要は、どれだけそれっぽく書けるかどうかよ」

「……それっぽく？」

「わかったようなわからないようなことを書いて分量を稼げばいいのよ。最後に印象的な文で締め括れば、なんとなくそれっぽい読後感を味わえるわ」

「……いや、そんなんで、いいの？」

「いいのよ。こういう基準で採点するんだかわかりやしないんだから」

「ま、哲学だもんねえ」

「ていうか、採点とかいうんじゃないの、これ。罰なの」  
「罰？」

「遅刻が多い、って。罰としてこれやってこい、って言うのよ、教授が」  
「それはまたご愁傷というか」

「大学生にもなって、なんで遅刻で罰課題出されなきゃいけないのよ。信じられないわ」  
「確かにねえ。そんな教授もいるんだ」

「たかだか五、六回連続で遅刻したくらいでさ。あのオヤジめ」

「いや、多いけど。寝坊？」

「まあね」

「もっと早く起きろよなあ」

「私が悪いんじゃないわよ」

「なんです」

「目覚ましが鳴らないの。……なによ、その笑いは」

「いや、小学生じゃないんだからさ。遅刻の言い訳に目覚ましは鳴らない、はないだろ」

「宇宙人にさらわれた、とかの方がいい？」

「それじゃCMだよ」

「確かに言い訳かもしれないけどね。でも私としては、起きようとする意思はあるわけよ。あの教授厳しいから、遅れないで出なくちゃ、と思うわけ」

「偉いねー」

「そ。その誠実さは認めてほしいものだわ」

「でもさ、目覚ましは壊れてるんだったら新しいの買い直せばいいだろ？五回も六回も目覚ましが鳴らない、は、さすがにマズイだろ」

「壊れてるんじゃないの」

「は？」

「私も壊れてるんじゃないかと思って試してみたんだけど、きちんと鳴るのよ。ただ、いざセツトして寝ると、朝鳴らないの。いつのまにか、セツトした時間過ぎちゃってるの」

「……いや、それって、無意識のうちに切っちゃってるんじゃないの？」

「無意識のうちに？」

「そだよ。寝ぼけたままスイッチ切っちゃってるだけだろうが」

「違うわよ」

「なんです。だって、壊れてはいないわけだろ？」

「うん」

「じゃあ鳴ってるわけじゃないか」

「私が寝てる時は鳴らないの。起きてる時だけ鳴るのよ」

「どっという目覚ましだよ」

「知らないわよ」

「ま、もっと音の大きい目覚ましでも買っただね」

「違うったら。鳴ってないんだってば」

「へいへい」

「……」

「睨むなつて。別に君がねばすけでも、オレは一向に構わないよ」

「違うつて言ってるのに」

「何が違うのさ」

「鳴ってないんだってば」

「だーかーらー」

「本当なの。私、わかったの。目覚まし、鳴ってないの」

「なんでわかるのさ。いいかい？ 鳴ったかどうかは簡単にわかるよ。起きててベルが鳴りゃ、鳴ったんだろうさ。でも、鳴ってない、つてことを言うのは難しいぜ。鳴ったということが無けりゃ鳴ってないんだろうけど、それを言いたけりゃ、ずっと起きてて、鳴る、つてことが無かったことを確認してなけりゃならないんだ。鳴ったことの証明は一瞬だけど、鳴らなかったことの証明は何時間もかかる。何かを『していない』ことの証明は、『した』ことの証明より、ずっと難しいんだぜ」

「どこで得た知識？」

「……カバチタレ」

「テレビドラマですか」

「テレビドラマですよ」

「まあいいけど」

「こういうの、悪魔の証明、つて言うんだつてさ。君は寝てるんだから、目覚ましは鳴っていないことをずっと確認してるわけじゃないだろ？ だから、鳴ってないだなんて言えないんだよ」

「鳴った、つてことは言えるつていうの？」

「まあ、それも言えないけど、状況としてはそう言わざるを得ないと思うね」

「違うの」

「まだ言いますか」

「本当に鳴ってないんだもの。どうして信じてくれないの？」

「いや、そういう言葉を恋人に言う時は、もうちょっと深刻なシチュエーションで言ってほしいんだけど」

「なによ深刻なシチュエーションつて」

「ほら、君が浮気しているぞつていう密告メールがあつたりとか、無実なのに殺人者の汚名を着せられていたりとか、そんなとき。そんなときだったら、オレも恋人の言うことだもの、信じてやるよ。警察が君を指名手配しても、かくまってあげるし、一緒に真犯人を探し出してやる」

「……あなた、近頃、なんか変な映画か本でも読んだ？」

「だけどさ、ほら、目覚まし時計が鳴るの鳴らないのつてことで、信じて！とか言われても、

困るわけですよ。なんかこう、ちっともググッ、てこないわけ」

「ドラマとかのシーンで無いかしら」

『君のこと、信じる。君の目覚まし時計は鳴ってなんかいやしかったんだ。愛してる』って？」

「んで、ぎゅっ、てするの」

「新手の試みですな」

「きつと感動すると思うわ」

「完璧にお笑いドラマだと思っけども。しかも一歩間違えると意味不明で誰もついてこれなくなる、諸刃の剣」

「……」

「……」

「なんか話が反れた気がするんだけど」

「ちっ」

「そうそう、鳴ってないの。目覚ましは」

「わかったわかった。鳴ってないんだろ。信じるよ。オレも、別れた理由はなんですか？目覚ましは鳴らないことを信じなかったからです。なんてことになりたくねえもん。信じますよ」

「信じてないじゃない」

「信じてる信じてる」

「目を見て言ってよ」

「信じてる信じてる」

「……本当に？」

「……本当に……」

「笑うなっ」

「ごめんごめん」

「……ちょっと待ってて、目覚まし持ってくるから」

「いや、さ、もういいじゃんかあ。レポートやんなくていいのー？」

「はつきりしないことがあるのは嫌なの。ちょっと待ってて。あ、お湯沸いたから、コーヒー淹れといてね」

「これが問題の目覚ましです」

「問題の、ね」

「きちんと鳴るのよ。聞く？」

「はあ。……それにしても、目つき悪いね、これ」

「お目覚めギコくん、ていうの。デパートで見つけて、可愛いから買った」

「可愛いかなあ」

「可愛いわよ」

「なんか、君の趣味ってさ、いまいちよくわかんないんだよね。変というか奇妙というか」  
「なんてったって、あなたとつきあってるんだものね」

「……」

「睨まないの」

「……」

「泣かないの。……踊っても駄目。あびょーん禁止!」

「ちえ」

「人前でやったら、別れるわよ」

「そんなに嫌?」

「聞くこと自体間違ってると思うわ。……ともかく、目覚ましがきちんと鳴るのを確認してね。『起きろ!ルア』って言うって起さしてくれるの。……ほら」

「憎たらしい声だなあ。……ん、二度寝防止機能ついてるじゃんか。こっちの後ろの方のスイッチを切らないと、また鳴るんだろ?」

「そうよ。『遅えぞ!ルア』って言うつよつよになるの」

「それでも、起きれないの?」

「だから、鳴ってないんだってば。それに、止める時はメインスイッチ切っちゃうから、この

機能意味ないのよね」

「なんでだよ。サブスイッチにしたら、また起こしてくれるのに」

「だって、うるさいじゃない」

「……」

「……なによ?」

「いや、君、今、目覚まし時計の存在意義そのものを否定した気がするんだけども」

「気のせいよ」

「そうかなあ」

「そうよ」

「ま、いいけど。……んで?鳴るのはわかったけど、朝には鳴らないってのは、どうやってわかるの?セツトして、朝まで待つ?」

「それもいいんだけど、起きてたら、鳴りそうな気がするのよ」

「……どうということだよ」

「だから、起きてたら鳴るんだけど、寝てたら鳴らなそうなのよね」

「いや、どういつ目覚ましだよ、それ。あのさあ、いい加減諦めなさいって。な?無意識に消しちゃってるだけだって」

「だって」

「いいじゃん。な?もうレポートやろつぜ。早くしないと、時間なくなっちまうよ」

「……」

「お代わり、淹れてくるよ。砂糖、二杯でいい？」

「……」

「……」

「……」

「……はあ、やっぱり難しいな。ていうか、何書いたらいいかわかんねえよ」

「……」

「君はどう？……って、君もほとんど進んでないじゃんか」

「うん」

「どうしような。哲学。哲学ねえ……」

「……木があるとするわね？」

「へ？」

「木があるとするの」

「いや、突然、何？」

「哲学の、有名な話なんだけど」

「へえ。何か思いついたの？」

「誰もいない、何もなしところに、木が立ってるの」

「はあ」

「それで、その木には一つだけ林檎の実がなってるのね」

「林檎」

「林檎」

「椎名」

「林檎」

「ふむ」

「それで、その実がぼとりと落ちるの。林檎は地面に当たるよね」

「うん」

「そのとき、音がするでしょ？」

「……はあ」

「その音は、存在したと言えるかしら」

「……は？」

「そついう話があるの」

「へえ……。いや、存在してるだろ、って。わけわかんねえ話だね」

「存在してると思う？」

「は？」

「本当に存在してるのかしら」

「……いや、だってさ、地面に落ちたわけだろ？ 林檎が。そしたら音が鳴るだろ。地面がよっぽど柔らかかったら別だけどさ」

「ええ。でも、それで音が存在すると言っているのかしら」

「何言ってるのさ、わけわかんねえなあ。だって、音が鳴ったんだから音が存在すんだろ？ 空気の振動？ そんなもんが発生するわけだからさ」

「でも、誰もいないのよ」

「……へ？」

「誰も、その音を聞いてないの」

「はあ」

「そしたらその音が存在すると、言っているのかしら」

「いや、ちょっと待ってよ、なんなのさ。聞いてなければ存在しないとも言っワケ？」

「違う？」

「いや、あのさ、何？ なんなのさ、わけわかんねえよ」

「真実とか事実って、なんだと思う？」

「……は？」

「真実と事実」

「いや、急にそこまで飛躍されても困っちゃうんだけど」

「このストープがここにあるのは、真実よね？ 私達の神経が正常で、幻覚とかじゃなければ」

「はあ」

「私とあなたが話しているのも、真実よね。あなたが私の作り出した妄想じゃなければ」

「君の作り出した妄想だったら、オレって君の理想のタイプってことなのかな」

「……それはいいとして。ともかく、とりあえず五感で感じたものは真実だと認めることにしましょうか」

「はあ」

「何かの存在を認知するくらい、まあ、真実とっていいくらい確度の高い情報って、これだけだと思うの。つまり、自分の五感で確認した情報ね。これなら、まあ自分が狂っているんじゃない限り、信じられるわね」

「うーん……」

「他人から聞いた情報っていうのは、もう少し確度が落ちるわ。たとえば、そうね、あなた、浮気してる？」

「いきなりなんだよ。してないよ」

「今のどもりが怪しい」

「してないったら。するわけないだろ？ こんな綺麗な　　ちょっと時々ついてけなくなるけど彼女がいんのにさ」



「今の情報も、私が浮気をしていない、という真実に比べたら確度が低いわ。ていうかもう、格段に」

「ひでえ。ホントしてないってば。ていうか、ずるいよ、君だって浮気してないとはわかんないじゃんか」

「実はしてるの」

「……」

「冗談よ」

「……いじめっこめ」

「まあ、あなたの言う通りよ。私が浮気をしてないかどうかは、あなたにはわからないわ。私から聞いただけの、確度の低い情報だものね」

「……」

「よく推理小説とかでもあるじゃない。間違はなくこの中に犯人がいる、ってことになって、『一体誰なのよ！白状しなさいよ！私はやってないんだから、あなた達のうちの誰かについてことよ！』とか言う人。その人が犯人じゃなければ、自分がやってないという真実を知っているのね。でも、他の人がそれを聞いて、なるほどそうだ、なんて納得していたら、犯人は誰もいなくなっちゃうわね。つまり自分が犯人でないという真実は自分だけのもので、他の人には通用しないの」

「……」

「でも自分が五感で得たこと以外を信用しなかったりしたら、生きていけないわね。私はアメリカへ行ったことがないけど、アメリカって本当に実在するのかしら、とかいちいち考えていたら、多分今ごろ発狂してるわ」

「……」

「だから、そこは他人の情報に頼るわけ。ただその情報は私にとって絶対的なものではなくて、ただ認めた方が都合がいいから事実としてるだけで、それに対する確証ってないわけよ。例えばね、旧石器捏造の人知ってる？自分で埋めて自分で掘り起こして大発見、とかやってた人」

「ああ、例のゴッドハンド？自作自演の奴だろ？」

「そう。彼のした事が暴かれなかったら、日本の歴史は違った解釈をされて、それが事実として認識されていたわけよね」

「……同じように、アメリカが実はドイツだった、とでもいうの？」

「まあ、似たようなことよ。一人じゃなくて、たくさんの人が証言してるから、可能性はずーっと低くなって、ほとんどゼロに近いけど」

「……」

「昔の人は天動説を事実として認識していたけど、それも今では覆ってるわね。結構、事実って不安定なのよ。今常識として認められていることも、覆る可能性は必ず秘めているわ。地動説だって、否定される日がくるかもしれないじゃない？」

「でも、天動説と違って、観測されてるだろ。根拠があるんだからさ」

「そのへんは、あまり問題じゃないと思うわ。ゴッドハンドの件だって、物証という根拠が否定されたし。昔の天動説の根拠は、もっと根本的なものよ。教会の教え、ね。当時の人々にとって、それは絶対的な根拠だったはずよ。それを、昔の人は馬鹿だった、なんて笑っても、いつか私達が笑われる日がくるかもしれないわね。科学という根拠が崩れ去る日が、無いとは限らないわ」

「科学が崩れる？……待つてよ。そりゃ、科学で証明できないことはたくさんありますよ。つか、今の科学ではね。未来はどうか、しんないよ。でも、既に証明されたことが崩れたりはしないだろ？」

「宗教も、信じる人にとっては同じことだわ。全世界レベルで洗脳されてしまえば、宗教の教えが科学よりも絶対なものになるでしょうね」

「でも、宗教は理論的じゃない」

「理論は問題にならないの。世界すべての人々が、地球は宇宙の中心だ、って言うてみなさいよ。いくら観測で結果を出して否定しても、ああ、面白いストーリーだね、って言われるだけだから。で、あなたは妄想狂ってことになるわね。地球は宇宙の中心であり続けるわ」

「……でも、事実は違うじゃない」

「どうやって証明するの？科学という証明の道具そのものが否定されたら、証明できないわ。そしたら、それが事実かどうかということもわからなくなるわね。で、宗教という別の証明道具で証明したら、全然別の結果になってしまいました。それが事実です」

「うーん……」

「価値観の問題よ。一足す一が二だということと、神様はいる、っていうことの、どちらに絶対的な確信を持っているか、ってこと」

「なんだか納得いかん」

「それは私達現代人が科学に絶対的な価値を置いてる証拠よ。古代人は同じように宗教に絶対的な価値を置いていたかもしれないわね。事実も単なる時代の流れ。唯一無二の絶対、なんて存在しないと思うわ」

「でもなあ……」

「それに、あなたも前に言うてたじゃない？誰か凄い数学者が、『数学の証明が正しい』ということは証明できない』ということを経験しちゃったって」

「ああ……誰だったっけ」

「忘れたけど。だから、世界中の数学者は、いつ矛盾が生じるか怯えながら研究しなければならぬ、とか言うてたじゃない？」

「いや、言うたけどさ……」

「つまり、根本的なところに、ただ信じるしかない、というものがあるわけよ。絶対的なものじゃないわ」

「……」

「数学の崩壊はそのまま科学の崩壊を意味するし、科学の崩壊は真実の崩壊を意味するわ。何

もかもが、引つ繰り返る可能性を秘めているの」

「なんかやだなあ」

「何かの存在にしたって、他人から聞いた話だけでは、絶対的な確証は得られないわ。誰かが『おまえの彼女が浮気してるのを見た』とか言ってきたても、あなた信じないよね？」

「うーん……」

「考えるな」

「いや、ちよつと頭がこんがらがらり……」

「少なくとも、ちよつと疑うだけでしょう？絶対そうだ！って決めてかからないわよね？」

「まあ」

「アメリカが存在しているかどうかってことも、本質的には同じことなの。ただ、その情報を真実と認識している人の数があまりに多いから、自分も真実と認めても良い、っていうだけだわ。準真実ね。自分が五感で得たものが真実で、他人から得たものが準真実。この二つは自分の中のもので、他人の真実と矛盾することもあるわ。で、真実の強さを測るために、事実ってものがあるの。事実っていうのは、そういう、真実の寄せ集めだと思っのね。いろんな人々の持つてる真実の中で、重なり合いの多い部分が事実、っていうか。つまり事実って、真実の多数決に過ぎないのよ。事実も、そういう相対的なもののよ。私が殺人の罪で指名手配されても、私が無実だということは私の中だけの真実であって、世界の人達がそれを真実だと認めなければ、私が人を殺したってことが事実になっちゃうわけよ。証拠が事実を示すというより、

証拠がいろんな人に真実を与えるの。それで、私がいくらやってないって言っても、嘘か、あるいは精神分裂でも起こしてるか、ってことになるの。私の真実は、精神分裂という名のもとに排除されてしまうわけ。民主主義的ね」

「そうかなあ」

「それで、真実も事実もそういう相対的なものだったら、誰も聞いていない林檎の音は、存在すらしていない、ということにならないかしら。誰の真実にもなりえないんだから、それは事実にならないわ。つまり、音は存在しない、ということになるわけ」

「……なんか、さっき君が言ってたことがわかった気がする」

「なに？」

「わかったようなわからないようなことを言って、最後をきちんと締めれば、それっぽい感じを味わえる、とか」

「でしょ？」

「まあ」

「それで、ここからが本題なんだけど」

「え、これが本題じゃなかったの？」

「違っの」

「……なにさ？」

「目覚まし時計が鳴ったと仮定するとね、音が出ているはずよね？」

「な……」

「でも、私は寝ていたわけだから、その音を聞いてないの。誰もその音を聞いてないの」

「……」

「そうすると、その音は存在しないわけ。音が存在しないってことは、そもそも目覚ましは鳴ってなかった、ってことになるの。これは矛盾よね。だから、鳴ったと仮定したのは間違いだった」

「……」

「だから、目覚ましは鳴ってなかったの」

「あのさ」

「なに？」

「もしかして、それを言いたくて、熱弁振るってたの？」

「まあ、そうね」

「レポートの話とか、そういうんじゃない？」

「レポート？……ああ」

「ああ、って」

「だって、あなたが信じてくれないんだもの」

「いや、だからって、真実や事実がどうのこうのって持ち出してまで……」

「負けず嫌いなものよ」

「そういう問題か？」

「ともかく、これで納得してもらえた？目覚ましは鳴ってなかったの」

「いや、納得しろって方が無理なよーな」

「なんでよ。私、何か間違ったこと言っただ？」

「ていうか、目覚まし時計と真実の概念を同列に扱おうという根性が凄い」

「褒め言葉と受け取っておくわ」

「つうかさ、あのね、そもそも哲学を道具にして論理を展開するってところが間違っではないやしないかと」

「なんで？」

「だって哲学だし」

「なに？するとあなたは、哲学なんて無意味で無駄で生ゴミ以下だとも言っただけ？」

「いや、そんなこと言ってないでしょ。ただ、えっと……」

「科学的じゃない？」

「いや、さ……」

「学問はその垣根を取り払われて、互いに融合していくべきじゃないかしら」

「いや、なんでもかんでも融合するのはマズイだろ。数学と文学を融合したりしたらエライことになるし」

「なんでよ」

「このベクトルの気持ちを述べよ、とか。作者の考えを数式で示せ、とか。なんかマズくない？」

「いいんじゃないの？」

「なんか、オレは君の度量の広さにはついてけなさそうだよ」

「ともかく、私は目覚ましが鳴ってなかったことさえ承知してもらえれば、それでいいの。それに命かけてるの」

「なんか、微妙な人生送ってるんだね……」

「まあ。……で？異存はない？」

「異存っていうかさ」

「なに？」

「あのさ、木の話、あつたよな？」

「ええ」

「林檎が落ちたけど、誰も聞いてないから、その音は存在してない、ってことだったっしょ？」

「そうね」

「木が聞いているじゃんか」

「……はい？」

「木が。木が音を聞いているよ」

「だって、木って植物じゃない」

「植物だって音を聞くだろう？」

「植物に聴覚はないでしょ？」

「だって、前に読んだことあるよ。なんか、二つの植物を用意してね、片方には音楽を聴かせておいて、もう片方はなんもしないで育てんの。勿論、他の条件は同じでね。そうすると、音楽を聴いてる方が、成長が早いんだってさ」

「それ、本当？」

「うん。だから植物を育てる時、声をかけながら育てるといい、とかよく言うじゃない」

「……知らなかったわ」

「で、その木が音を聞いているんだったら、林檎の音も存在していたってことになるじゃない？まさか、人間限定とか言わないよな？人間しか真実を知り得ない、とか言わねえだろ？」

「それは、言わないけど……」

「じゃ、やっぱり音はあるんだよ。な？」

「……」

「お認めいただけましたか？」

「確かにその場合はそうかもしれないけど。でも、私の部屋には木も花も置いてないもの」

「なんも？」

「なにも」

「……」

「……」

「部屋を見せていただきましょうか」

「なにか邪なこと考えてるんじゃない？」

「そんなことないよ。確認するだけさ。よっと」

「あ、こら。ちょっと待ってよ」

「開けていい？」

「……いいけど」

「それじゃ、開けゴマー、っと」

「……ださ」

「……こりや見事に散らかっていませんか？」

「それほどでもないわよ」

「いやいやご謙遜を」

「いつもはこんなでもないの」

「ほうほうそれはそれは、とんだ偶然で」

「植物、無いでしょ？」

「んー。ちょっと探ってみないとわかりませんー」

「変態」

「あ、なんだよ、ひっでえなあ。家宅搜索だよ家宅搜索」

「無いって言うてるでしょ」

「んー、っと」

「あんまりいじらないでよ」

「これ以上散らからないよ。痛て、やめろって。……これは？」

「もう枯れてるわ」

「……これ、いつの？」

「記憶に無いわ」

「ったく。捨てるよな、だらしない」

「あなたに言われるなんて……」

「他には……特になさそうだな」

「それが最初で最後だったんだもの。友達に貰って育て始めたんだけど、すぐ枯らしちゃって。自信なくしたの」

「……パイプのベッドに、木製のテーブル。椅子はプラスチックで……本棚。これも木製」

「テーブルや本棚の木は、当然ながらも死んでるから、音は聞けないわよ」

「ふむ……引出しの中は、見ていい？……なんだよ、睨むなよ」

「プライバシーの侵害」

「はいはい。でも、どうしよっかな、役に立ちそうなのが見当たらない」

「でしょ？」

「目覚ましが鳴った時に、虫でもいたらそいつが証拠になるんだろうけど、わかんねえなあ」

「……虫も？」

「止まってる虫の側で大きな音出したら、驚いて逃げ出すじゃん？音を聞いているからじゃない？」

「……」

「さすがに微生物とかバクテリアとかミトコンドリアまで話広げないから安心していいですよ。つうか、聴覚持ってるかどうか知んねえし」

「……なんだか、あなたも相当粘着ね」

「はははそんな、君ほどじゃないですって」

「粘着」

「ねえ、目覚ましさ、音漏れはしないわけ？」

「音漏れ？」

「目覚ましの音。部屋の外に漏れたりしてたらさ、聞く人は君以外にもいるわけじゃない。隣の部屋まで音が聞こえてた、とかさ」

「ここ、防音設備はいいもの」

「でも目覚ましの音だぜ？」

「聞いたでしょ？そんなに大きい音じゃないわ」

「どうだろうねえ」

「……調べてみましょうよ」

「……へ？」

「外に出て、調べてみましょうよ。はつきりしないのは嫌なの」

「なあ、なんかオレら、滅茶苦茶馬鹿みたいじゃないか？」

「そう？」

「そうだよ。あー、寒っ！」

「ええい離れるオオカミ」

「いいじゃん、あつたかいだろ？」

「……ともかく、漏れてなかったでしょ？」

「ああ、まあな。このクソ寒い中、外で頑張った甲斐はあった……わけだ」

「自信なさげね」

「そりゃあ」

「でも、隣の部屋の人、不審そうな顔してたね」

「そりやそうだろ。いきなり訪ねてって、朝、目覚ましの音聞こえませんか？だもの。不審がるに決まってるじゃん」

「まあ、あまりお付き合い無いからいいけど」

「いいんですか」

「とにかく、漏れてなかったでしょ？」

「うーむ」

「これで納得してもらえた？」

「隣室には漏れてなかった。窓から外へも漏れてなかった」

「部屋の中だけだわ」

「寝室とリビング、ね」

「リビングにも植物は無いわよ」

「冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、ストーブ、テーブル、椅子……」

「音は聞けないわね」

「このバスケットは？林檎に、蜜柑に」

「木から切り離したら死んじゃってるんじゃない？養分も何も供給してないんだし」

「でも、熟れたりするのって、生きてるってことじゃない？」

「熟れるのは生体活動とは違うわ。死後硬直、っていうか、死後軟化？」

「……蜜柑が熟れてくるのは、人間が死後硬直するみたいなもんだって言うの？」

「似たようなもんじゃない？」

「……なんか、しばらく果物を食べたくない感じだよ」

「他には？」

「冷蔵庫、開けていい？」

「頑張るわねー」

「負けず嫌いなんだよ」

「ま、いいけどね」

「んじゃ、お言葉に甘えて。お宅の冷蔵庫はいけーん」

「……何かある？」

「……タマゴ」

「暖めても雛は孵らないわよ」

「牛肉細切れ」

「細切れに耳は無いわ」

「豚腿肉五百グラム。二百五十円」

「特売品に耳は無いわ」

「セロリ。白菜。人参。椎茸。レタス」

「お亡くなりになっております」



「蒟蒻ゼリー！アロエヨーグルト！ねるねるねるね！」

「ほほほほ」

「くそお、何かないか何かないか」

「諦めなさい」

「何かないか何か あ」

「……何よ。そのボウルは……えっと」

「アサリ」

「ああ、アサリを水に浸して入れといたんだったわ。でも残念。とっくに」

「生きてる」

「……え？」

「生きてる！動いてる！」

「馬鹿なっ」

「これいつ買ったやつ？」

「……一週間くらい前。賈い物なんだけど」

「長生きするもんだなあ。ま、一週間だったら、十分目覚ましの音を聞いているはずすな」

「……アサリに聴覚つてあるの？」

「……」

「それが問題でしょ？」

「……調べてみよう」

「わかんないね」

「うん」

「ネットも万能じゃないわね」

「貝に耳があるかどうかがすぐにわからないようじゃ、ネットも情報システムとして、まだまだ未熟だったことさ」

「……まあ、勝負はおあずけね」

「ていうかね、ちょっと考えたんだけどさ」

「なに。まだなにかあるの？」

「そもそも前提条件として、君を抜かしたことは正しいんだろうか」

「……どういうことよ」

「だってさ、寝てたってさ、音は聞こえるんじゃない？」

「……認識はできないわ」

「それは木だって同じことだよ。音が聞こえてても、あ、聞こえてるなー、とか認識してるとは思えないけど」

「さあ、木になったことないからわかんないわね」

「まあね。小学生ん時、劇で木役になったことだったらあるけれども」

「……」

「クラス全員一致で、木役はオレに適任、ってなった」

「……あなた、いじめられっこだった？」

「……そうだったのかな。いや、そんなことなかったけど」

「まあ、意味不明なクラスだった、ということで理解しておくわ」

「ともかく、重要な点なんけども、存在について、どうするのさ。無意識の認識と、意識的な認識に分けてみようか？前者は認めない？そうすると、随分この世界は欠落しちゃう気がするけどね」

「うーん……」

「犬なり鳥なり魚なり虫なり、どこからが意識的な認識をしてて、どこからが無意識的な認識なのか、わかんねえし。犬は意識的だと思うけど、虫は無意識的な感じがすんなあ。音が聞こえたぞゴルフ、とか考えてるとは、あんま思えねえもん」

「わかったわよ。無意識も認めるわよ」

「そうすつと、寝てても音は無意識的に認識してるんだから、音は存在した。つまり、目覚ましは鳴った、ってことで、いかが？」

「無意識的に、認識してるのかしら」

「夢とかに出るじゃん。周りでうるさい音がしてたらさ、夢ん中でもその音が聞こえてたりさ。無意識的に認識してるからっしょ？」

「……そんな夢見てない」

「忘れてるだけだって」

「……」

「観念しました？」

「……ねえ」

「……ん？」

「……忘れてることって、存在したのかしら？」

「……」

「……」

「……は？」

「朝だね」

「朝ね」

「朝日だね」

「朝日ね」

「コーヒー、これで何杯目？」

「もう数えてないわ」

「なんか、とてつもなく無意味な時間を過ごした気、しない？」

「ちよつと」

「レポート」

「レポート」

「白いね」

「白いわね」

「まるで」

「生まれたての」

「赤ん坊の」

「ように」

「あははは」

「あははは」

「……」

「……」

「……」

「……錯乱してる場合じゃないわ」

「誰のせいでこうなったと思ってるんだよ。聞こえなきゃ存在しないとか忘れてたら存在しないとか生物が存在しなかった時の宇宙は存在しないとかそもそも現実には存在は存在の存在が存在するための存在とか」

「落ちついて」

「なんで目覚まし時計のために、ここまでやらなきゃいけないんだよ」

「まあ、とりあえずレポートのネタになりそうだからいいじゃない」

「ネタにねー」

「ネタねー」

「とりあえずさ、もう、レポート間に合わないよ」

「しょうがないわ。明日まで待ってもらうようにお願いしてみる」

「オレ疲れたよー」

「私も疲れたわ」

「はう……」

「眠い……」

「……」

「……」

「……ねー」

「……なーに？」  
「君、存在してるー？」  
「多分存在してると思うわー」  
「……君が存在してることを、確かめていいー？」  
「そんな方法、あるのー？」  
「あるさあ」  
「どうやって」  
「……」  
「……」  
「……こうやって」  
「……オオカミ」

“……以上より、目覚まし時計が鳴らなかったかどうかを確認するため、以下の事柄を調べる  
ことが必要である。

- 一、アサリ貝は聴覚を有するか否か。
- 二、筆者が見た夢に、音が知覚されていたか否か。（催眠術を用いることが考えられる）

三、……”

哲学レポートより抜粋